

■第 11 回精神障害者自立支援活動賞（リリー賞）受賞者 【当事者部門】

双極性障害などの当事者による精神障害者が集える場の運営、培った信頼関係で緊急入院時支援も実施

いこいの場ほっとハウス 【京都府宇治市】

1992 年 4 月、双極性障害などの当事者 4 名が集い、町なかで精神障害者が安心して過ごせるいこいの場を開設。フリースペースに、毎日 20～30 名の利用者が大家族のように集い、思い思いの時間を過ごしている。利用者の体調が悪い時には訪問や弁当配達、緊急入院時には診察への付き添いなどのピアサポートや、病院への情報提供、病院間の橋渡し等の調整を行い、利用者が適切な医療を受けられるよう活動している。日々の生活の中で直面するニーズに敏感に対応して、精神障害者が地域で安心して暮らしていくための活動を当事者自ら創り出し、23 年にわたり継続してきたことが高く評価された。

●当事者仲間で立ち上げた憩いの場

創設メンバーのひとり、棚谷直巳さんは 19 歳の頃、精神的に不安定になり、後に双極性障害と診断された。職員として精神障害者の共同作業所で働いた経験から、当事者が自分らしくいられる憩いの場が必要だと実感、当事者仲間 3 名と「ほっとハウス」を開設した。当初は手作りキムチを販売するなどして活動資金を作っていたが、小規模共同作業所を経て 2012 年に地域活動支援センターとなり、現在は支援スタッフを含む常勤 3 人、パート 2 人で運営にあたっている。



「ほっとハウス」は閑静な住宅街にある一軒家
開所時間は月一金の 9 時～16 時

●フリースペースで、“病を出した素顔の私”で過ごす

精神疾患を抱える人たちの「いこいの場ほっとハウス」には決められたプログラムはない。おしゃべりする人、絵を描く人、ひとり静かに過ごす人―。家族的な雰囲気の中で、めいめいが自由に時間を過ごす。昼は 350 円ずつを出し合って作った食事を囲み、体調の悪い利用者には自宅まで弁当を届ける。「社会や家族の中で緊張して生きていた人が、ほっとして『素顔』を出せる、自分らしくいられる場が必要なんです」と棚谷さん。自身も服薬と通院を続け、病気と付き合いながら活動している。



利用者の中には美術展で入選を重ねる人や
ギャラリーで個展を開く人もいる

●「生活のしづらさ」を抱える当事者の家庭や地域の役割を補う

日常生活を共に過ごすことで利用者との間に信頼関係が生まれ、自然な流れで生活面のピアサポートや緊急入院時の支援活動が始まった。ほっとハウスの利用者が受診歴のない総合病院などに緊急入院した際には、その人の普段の様子を病院側に伝えたり、かかりつけの精神科医との橋渡しをしたりする。「その人の『素顔』を知っているからこそできる活動。かつて家庭や地域が担っていた役割の一部を、現代社会では誰かが補わなければ」と棚谷さんは言う。



創設メンバーのひとり棚谷直巳さん(右)は昨秋、
所長の役目を丸一俊介さん(左)に引き継いだ

●活動のこれから

活動開始から 23 年、地域の理解は格段に進んだという。「それでも精神障害者の家族のことを表に出せない人が、まだまだたくさんいる。そういう人たちの気持ちも解決していきたい」と棚谷さんは今後の展望について語る。